

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第82号

平成31年1月8日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

正行は顕氏との戦いに終始し、正儀は頼之に利用された

管領細川頼之、宮方を弱体化し義満政権を不動に

楠氏の生き方に汚点を残したか、正儀

吉野朝で苦境に立った正儀

11月例会は、楠正行の弟、正儀が北朝に降ったときの管領、細川頼之を取り上げました。

正行が全対決した細川顕氏と頼之の父、頼春は従兄弟の関係にあります。頼春は、足利尊氏の丹波篠村八幡宮の旗揚げに参加した武将で、尊氏から四国に派遣され、四国の雄、河野氏と対立します。しかし、観応の擾乱では尊氏党に属し、足利直義没落後勢力を強め、正平7年、南軍の京都突入の際、戦死をしています。

頼之は、足利二代将軍、義詮の遺托によって足利義満を補佐し、管領として、義満将軍の権威発揚に尽くし、室町幕府の基礎を固めた武将です。

一旦政争に敗れ、義満の命を受け四国に退去しますが、四国における分国経営に専念し、一族繁栄の基盤を構築しました。晩年、復権を遂げ、義満に最後の奉公をすることになりますが、南北両朝の和議の成立する明徳3年(1392)、南北朝合一を見ず亡くなっています。

楠氏から見れば、正行は細川顕氏との戦いに終始し勝利を収めました。正儀は、細川頼之に利用されました。

すなわち、細川頼之の視点から見れば、正儀は、自ら積極的に足利幕府に降ったのではなく、後村上天皇崩御後、吉野朝内で苦境に立った正儀がひそかに幕府に誼を通じたものでした。頼之にとって、正儀は一つのコマにすぎず、頼之は南北合一よりも、幕府の基礎構築に大義を求め、宮方を弱体化し義満政権を不動のものにするため、正儀を降下させ、利用したといえます。

結論として、正儀が北朝=幕府に降ったのは失敗であったと言えるのではないのでしょうか。北朝に降った正儀は南軍

とも戦っており、南軍の弱体化にも手を貸したことになり、楠氏の生き方に汚点を残したともいえます。

頼之、中国管領そして四国管領に

もう少し詳しく頼之の生涯を見てみましょう。

延文年間、直冬党が中国地方を制圧すると、頼之は、大将(中国管領)として中国追討軍の先頭に立ち、活躍します。

尊氏死後、義詮が将軍職を継ぎますと、その執事に、頼之の従兄弟の細川清氏が就きます。しかし、この清氏は強引な性格の持ち主で、斯波一族と対立し、結果として、南軍の摂津進出を許したことから、義詮から清氏討伐命を受けることとなり、この頃、四国・讃岐に滞在した頼之は四国最大の豪族河野通盛と交渉の上、阿波に降ってきた清氏を、白鳳山麓に討ち取ります。

この後、頼之は中国管領を辞し、四国経営に専念し、阿波、伊予に加えて讃岐、土佐も分国に加え、四国管領に君臨します。

貞治6年(1367)11月25日、重篤だった義詮は、枕元に頼之を呼び寄せ、義満への家督の譲与と頼之、管領の新任を伝えたといわ

れています。

「汝のために一子を与えん」

この時義詮38歳は、39歳の頼之に「われ今汝のために一子を与えん。」と義満の補佐を託し、10歳の義満に「汝のために一父を与えん。その教えに違えるな。」と頼之を頼り、頼之の教えを守れ、と遺命を残したのです。

頼之は、この後、ほぼ10年にわたって管領の座に就き、幕府を束ねることになります。



頼之は、九州の足利方を激励したり、多数の寺院に義詮の遺骨や遺髪を分納し、諸寺に配慮を見せ、儉約令を發布、更には將軍義満の権威高揚のため、評定始めに出席させたり、元服の儀を盛大に催し、義詮1周忌も盛大に、そして花の御所の造営を手掛け、義満の官位昇進を図りました。

後村上天皇崩御で、立場失う正儀

応安元年（1368：吉野朝年号正平23年）、和睦論者の後村上天皇が崩御し、主戦論者の長慶天皇が即位すると、講和主張の楠正儀は苦境に陥ります。

楠木正儀は吉野朝内での立場を維持することが難しくなり、秘かに幕府=北朝に誼を通じたものと思われま

す。一方、管領頼之は、応安2年（1369）1月2日、正儀に帰参を認める御教書を与え、2月7日、正儀の帰参を河内・和泉両国に通達を出しています。頼之の攻略が成功したといえるでしょう。

この頃は、管領、頼之の権勢全盛の時代で、4月2日、頼之は正儀と対面の上、正儀は義満にも謁見をしています。

そして、正儀降下を契機として、頼之は河内・伊勢の南軍圧迫作戦を開始しますが、この頃、頼之の権勢に対する反感も高まります。その先鋒は、土岐頼康で、山名、畠山、一色、仁木、赤松らは「正儀に河内を保つ力はない」と頼之の命に従わず、淀川を渡りませんでした。背景に、正儀の誘降は頼之の独断専行との非難があったのです。

しかし、応安6年（1373）、頼之は一族を伊勢・河内に発向させ、この年8月には、四条隆俊以下多数を討ち取り、幕府による河内平定になると、長慶天皇は河内天野を撤退して、吉野に還幸します。

河内平定後、頼之は、橋本正督の幕府誘降、更には和田助氏の帰順も進めます。しかし、頼之派と反頼之派の軋轢はますます激しくなっていました。

頼之支持派の佐々木道誉、赤松則祐、畠山義深、一色範光、今川了俊、仁木義長と反頼之派の土岐一族、山名一族、渋川氏らとの軋轢が激化する中、紀伊の橋本正督が再び南軍に帰参し、紀伊に立つと、幕府軍が敗退してしまい、將軍、義満が怒り、永和4年（1378）、義満は和泉の守楠正儀、紀伊守護細川業秀を罷免します。そして、幕府軍が紀州を制圧すると、頼之打倒の火の手が上がり、康暦の政変が起こります。

頼之一族こそって四国へ下向

すなわち、京極高秀や土岐直氏らが、將軍、義満に頼之追放を強要するに及び、康暦元年（1379）、義満は頼之に京都退出を命令し、頼之は管領の座を奪われ、失脚します。

以下は、頼之が、四国下国時に残した七絶です。

人生五十愧無功(人生五十 功なきをはず)
花木春過夏己中(花木春過ぎて、夏既に半ば)
満室蒼蠅掃難尽(満室のそよう掃へども 尽くし難し)
去尋禪榻臥清風(去りて禪榻を訪ね清風に臥せん)

頼之は失脚し、四国に降りますが、この時細川一族、被

官はことごとく、こぞって従っています。そして、一族団結して、四国の軍事的支配を拡大していくのでした。

四国に降って約10年、頼之は軍事力を固辞しながら、義満に対して赦免を運動し続けます。四国の雄、河野氏と和解し、分国統治の充実を図りながら、政界復帰への道を模索し続けるのです。

義満の敵島参詣に100余艇の船を提供

そして康応元年（1389）、將軍義満の敵島参詣に際し、頼之は、100余艇の船を提供するのです。

この後、義満が6分の1殿（66国中、11国の守護職）と言われた山名を追討し、土岐氏を討ち、管領、斯波義将が辞任して越前に降ると、明徳2年（1391）4月、頼之が入京を果たすと、同月、義満は頼之の弟・頼元を管領にし、頼之に後見を命じました。

そして、明徳の乱で山名氏清が挙兵すると、頼之は、直ちに鎮定をし、將軍、義満の権威を發揚します。

また、この頃、南軍の楠正勝・正元兄弟が千早城籠城戦を戦いますが、畠山氏が千早城を陥れ、南軍の勢力は風前の灯になりました。

翌年、明徳3年（1392）、頼之は、64歳の人生を閉じます。そして、この年10月、南北朝の和議が成立し、南北朝が合一しました。

幕府の礎を築いた名将、細川頼之

このように細川頼之という一人の武将の生涯を見てみると、室町幕府にあって、その草創期、幕府の礎を築いた名将ともいえるのではないのでしょうか。

楠氏も、地元の民に愛されたといわれています。

頼之も、分国経営に専念し、一族郎党に慕われたリーダーシップのある武将だったのでしょう。ために、頼之の末裔は何代にもわたって管領の座についています。

頼之は、正儀を利用し、吉野朝=官方を弱体化させ、義満政権=幕府を不動にした武将といえるでしょう。

（年号は北朝。写真は、いずれも、人物叢書「細川頼之」吉川弘文館からの転載）

（文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭）



細川頼春画像
(無涯仁浩賛、熊本市、永青文庫所蔵)